

学校評価計画

令和5年度 学校自己評価シート

福生市立福生第二小学校 校長 湊 仁 公 助



学校教育目標 ○よく考える子 思いやりのある子 体を大切にする子

目指す学校像 (ビジョン・ミッション)

みんなが楽しくなる学校 (児童、保護者、地域、教職員、だれもが楽しくなることを目指す)

<p>【目指す学校像】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 児童が、わかる喜び、できる喜びを感じる学校 ○ 保護者が、安心して子供を預けられる学校 ○ 地域の方が、地域の子供たちの成長を見守ることができる学校 ○ 学校を核として関係機関とチームとして連携する学校 	<p>【目指す教職員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子供たちに愛情を注ぐことができる教師 ○ 授業改善をめざし、指導力向上に努める教師 ○ 組織を意識し、チームで動ける教師 ○ 公務員としての自覚をもち、信頼される教師 	<p>【目指す児童・生徒像】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の考えをもち、自分の言葉で表現できる児童 ○ 自分も友達も大切にできる児童 ○ 自分の健康に気を付け進んで体を動かす児童
--	--	---

領域	三カ年経営目標	本年度経営目標	目標達成のための方策	取組指標 (教職員の取組)	取組自己評価				成果指標 (児童・生徒等の変容・成果)	成果自己評価				分析・改善策
					当初 中期 年間 評価					当初 中期 年間 評価				
					目標達成	80	80	90		目標達成	80	80	90	
学校経営	「チーム学校」の確立	安心、安全な学校作り	<ul style="list-style-type: none"> ○ 安全安心を優先した取組・感染症対策の徹底 ○ 登校確認体制の整備 ○ 防災、安全教育の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 重点目標を明確にした全職員が一致した生活指導の実践 	80	80	90	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	80	80	80	B	CS・PTA支部との連携により、登下校時の安全見守りが図れたが、児童の交通安全等の意識は十分とは言えなかった。避難訓練等で避難行動が速やかにできた。また、防災意識を高める働きかけができた。
		常に改善し続ける組織作り	<ul style="list-style-type: none"> ○ 職務目的の共有化 ○ 報告、連絡、相談の充実 ○ 常に改善し続ける意識 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童育成のためという目的に基づいた職務行動と職務改善の遂行 	70	80	90	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	75	80	80	B	経営会議を中心に、学年・分掌等の組織、報告、連絡、相談、記録を行えるようになってきた。早期対応等も意識してきている。今後は教職員一人一人が主体者となるように進めていく。
		関係機関とチームとしての連携	<ul style="list-style-type: none"> ○ 情報の共有システム ○ 専門機関と協同した対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係機関との迅速かつ適切な情報共有と対応 	70	80	80	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係機関による評価 (年度末) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	70	80	A	関係機関との情報共有・連携を積極的に進められた。定期・未然防止の観点で、積極的に連携を図ることができた。継続的に取り組んでいきたい。
学力向上	学びに向かう力の育成	授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 関心を高める課題設定 ○ iPadの積極活用 ○ 主体的な学びの場の工夫 ○ 学習規律の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導要領の理解やGIGAスクール構想の具現化 ・ 校内研究の充実による授業の質の向上 ・ 教員の創意工夫による授業改善 	80	80	90	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	80	80	90	C	GIGAスクール構想の具現化に向けた、積極的なタブレット端末やICT機器利用ができて、効果検証を十分に進められなかった。併せて個別最適な学びや協働的な学びに繋げることが課題となる。
		教員の資質向上	<ul style="list-style-type: none"> ○ 週ごとの計画の充実と評価 ○ 積極的な研修受講 ○ 教員間の学び合いの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 専門性を高めるためのたゆまぬ研修と計画的な授業準備および学び合いの実施 	80	80	90	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員による自己評価 (学期ごと) 	80	80	90	A	週ごとの指導計画を確実に立てた計画的な授業を全職員が実践することができた。また、OJTの内容が充実して、相互の学び合いが浸透してきた。
		学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝学習の活用 ○ 読書の習慣化 ○ 放課後学習の展開 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全職員での「ふっさっ子学習スタンダード」と確認と一致した指導 	70	70	80	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	70	80	B	放課後学習教室が実施でき、学習支援・学習習慣の定着への働きかけができた。今後は自律的な学習習慣の確立を目指していきたい。
健全育成	健康な心と体の育成	不登校0	<ul style="list-style-type: none"> ○ 毎日の登校状況の確認 ○ 個に応じた迅速な対応 ○ 保護者と適時面談 ○ 関係諸機関との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 不登校児童の理解と個別対応 	70	70	70	C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係機関による評価 (年度末) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	70	70	C	不登校傾向の児童は微増・微減した。特別支援委員会等の対応ができ、不登校傾向を示す全児童への対策・連携を行い、改善を図る例もあった。引き続き、細やかな対応・連携で改善を図りたい。
		適切な運動による心身の活性化	<ul style="list-style-type: none"> ○ 汗をかき遊びの励行 ○ 縦割り活動の充実 ○ 体育的取組の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意図的な外遊びの励行 ・ 計画的な体育的取組の実施 	70	70	80	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	70	80	B	視覚障害者の方の話など、効果的であった。「なわとび週間」「持久走週間」の取組も子供たちはよく取り組んでいた。たてわり活動では、リーダーの育成、協力の気持ちなど豊かな人間関係を育み、さらに活性化した。
		思いやりの心の醸成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 言語環境の適正化 ○ 学校環境の整理清潔化 ○ 道徳科の授業の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適正な言葉遣い定着に向けての学校としての取組 ・ 教室の整理、清潔な環境作り ・ 道徳科の授業の改善 	80	85	90	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	80	80	85	B	教育活動全体で「思いやり」の心情的育む実践に取り組んだ。挨拶の励行がよくなり、児童に相手意識と思いやりの気持ちが醸成が図られた。
特色ある学校づくり	健全なふっさっ子の育成	ふっさっ子の自覚と誇り	<ul style="list-style-type: none"> ○ 英語教育の推進と英検受験 ○ 市施設を活用した学習 ○ 特別支援教育の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学年、英語の授業実施 ・ 市施設の活用 ・ 固定学級、通級との連携と充実。特支教室の展開 	70	70	80	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	70	80	B	全学年の英語授業を実施し、ALTや英語ウィーク・TGGの活用を積極的に行えた。特別支援学校のコーディネーターと連携し、専門性や具体的な支援の在り方を実践的に学ぶことができた。
		地域理解と協働	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域を知る校外学習の充実 ○ 地域の教育力の活用 ○ PTA活動への協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校支援C。との連携による地域学習の充実 ・ PTA活動への協力と児童育成の共通実践 	70	70	80	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者・児童による評価 (年1回) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	70	80	A	学区内の幼保との交流を行い、学んだことを生かしながら児童のより主体的、かつ活発な交流ができた。 ・ 二小くまっ子応援団により、コロナ以前以上に積極的に地域人材や教材を活用する学習ができた。 ・ CS委員会を年間6回実施し、二小CS研修会やCS便りの発行など活動の円滑な運営や紹介することができた。より効果的な教育活動への関与ができた。CS総会では本校の活動の紹介し、成果が発表された。
		コミュニティスクールの実現	<ul style="list-style-type: none"> ○ コミュニティスクールの活動内容の充実 ○ 地域関係者との対話および協議 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域が求める学校についての協議、検討 ・ CS委員会の推進 ・ CS便りの発行 (学期1回) 	80	85	90	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係機関による評価 (年度末) ・ 教職員による自己評価 (年1回) 	70	80	90	A	*コロナ禍の影響による活動の制約